

東日本大震災への救援活動

第18航空団広報局

2011年3月11日に発生した東日本大震災により多くの方の尊い命が失われたことに対し深い哀悼の意を表します。また被災された方々に対し心からお見舞いを申し上げます。

嘉手納基地の隊員らは地震発生後、在日米軍指揮のもと捜索・救難活動に関わっております。下記は嘉手納基地のホームページに掲載された救援活動記事の内容をまとめたものです。



3月20日

20日、横田基地にて、嘉手納基地第33救難中隊所属の空軍兵士2名がHH-60ヘリコプターへ医療品を搬入していました。同ヘリ2機はこれから気仙沼市の被災地へ物資を運ぶ予定です。同日、気仙沼市内の避難所にいる方々へ食料・飲料水・医療品を無事届けることができました。避難所の支援受入れ担当者が空軍兵士コックス上等兵へお礼を述べています。



(3点、米空軍：クリストファー・ラブ少尉撮影)

3月19日

第733空輸機動支援中隊、第18兵站即応中隊の要員は、嘉手納基地から出発する陸上自衛隊那覇基地第15旅団の被災地派遣に伴う人員・車両等の搬入・出発作業を支援しました。3月16日夕方から始まった一連の作業は、合計100名余の自衛官、およそ60台の車両その他器材をブリズベンを本拠地とするオーストラリア空軍機C-17に搭乗・搭載し横田基地へ移動しました。第18兵站即応中隊のエクウォール中尉によると、これまで人道支援活動のためおよそ250名の人員、およそ600トンの物資が嘉手納基地を経由して移動、空輸されたとのことです。



(米空軍：メイソン・エレメン上等兵撮影)

3月19日

3月16日、日本側とともに第353特殊作戦群要員は航空自衛隊松島基地の飛行場運用を再開させることができました。3月18日、横田基地から松島基地へ飛行中、嘉手納基地駐留の第17特殊作戦中隊のMC-130P空中給油機は、高度を1000フィートまで下げ、東北地方沿岸沖で捜索・救助活動を実施していた同じく嘉手納基地所属のHH-60機4機に空中給油を実施しました。



(米空軍：ヤスオ・オサカベ撮影)

第17中隊のマイケル・ミリチ曹長は、「航空機に空中で給油することにより、ヘリの捜索活動が中断なく継続できる。それが我々の任務である。」と話しました。

「数百、数千の家屋が海上に浮かんでいて、どこもかしこも瓦礫の山しかみえない。この津波がもたらした甚大な被害を目の当たりにした」と、給油機のパイロット補佐であるレッドモン少佐がそのときに見た状況を話しました。

(次ページへ続く)

CONTENTS

東日本大震災への救済活動

第19回沖縄マラソンに今年も嘉手納基地が協力

嘉手納外語塾12期生卒業式・新たな巣立ち

日米文化交流会

県立高校入試期間中における、航空機活動の自粛



(前ページより続き)

3月18日



(米空軍：メイソン・エレメン上等兵撮影)



(米空軍：フヨナサン・ステフェン二等軍曹撮影)

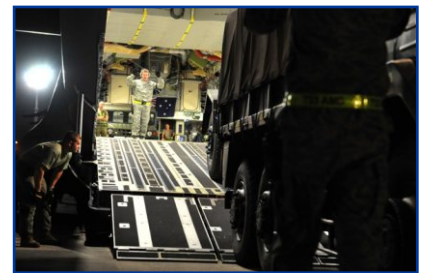
第623航空管制中隊の要員は横田基地へ到着。増大する救難飛行運用の管制支援を行うためです。
第353特殊作戦群から新たに15人の空軍兵が、救難用資材・物資をMC-130輸送機に積み嘉手納基地を出発、横田基地を拠点とする人道援助活動に従事しています。同空軍兵らは非常に困難な環境の中で活動できる技能を備え、要員らは医療、通信、整備の分野における専門的な高度の訓練を受けています。第353特殊作戦群は日本政府への支援として現在、およそ115名の空軍兵と3機の航空機を派遣しています。第909空中給油中隊は空中給油を随時行ない、また航空機一機を緊急の医療搬送に備えて待機させています。
DECA（国防省食料品調達機関、いわゆるコミサリー）は2万ポンド（およそ9トン）のペットボトル飲料水を提供しました。搬送拠点飛行場である三沢基地を通して被災者へ届けられます。

JAPAN RELIEF

3月17日 FARPとよばれる『前方展開地域燃料補給所』チームが横田基地へ派遣されました。救難活動に関わる航空機は着陸・給油・離陸を繰り返しますが、拠点飛行場における所用時間を短縮できるよう作業をすすめるチームであり、これにより迅速な航空機燃料の補給が可能となりました。（FARP—a forward area refueling point）

第17特殊作戦中隊の飛行技師であるハーウッド等軍曹は、FARP燃料補給所として機能する山形空港における航空機の離陸・着陸の距離を計算しました。FARPチームはMC-130P空中給油機からおよそ36,000ポンド（およそ16トン）のJP8燃料を抜き取り、4つの簡易燃料貯油袋に入れ替えました。FARPチームは航空機が燃料のない場所へ着陸して燃料補給を受ける際有効に機能します。それらの場所が遠隔の地、また厳しい環境にあってもFARPチームは燃料を提供することができます。山形空港に搬入された燃料は米軍機の捜索・救助活動のために使用される予定です。

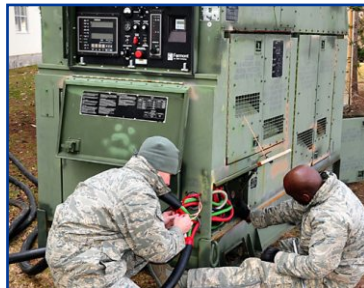
(米空軍：マリー・ブラウン二等軍曹撮影)



(2点、米空軍：サラ・シュリラ兵長撮影)



(米空軍：サミュエル・モーズ二等軍曹撮影)



3月14日

3月11日の大地震の影響で三沢基地でも揺れを感じた後、基地は停電状態になりました。嘉手納基地第18施設中隊所属のコープ上等兵及びドッティン一等軍曹は三沢基地へ派遣され、14日、三沢基地の宿泊所にある発電機にケーブルをつなぐなど電気の復旧工事を行いました。

3月13日 米空軍と米海兵隊の空輸部隊の幹部及び救難要員は、HH-60捜索・救助ヘリコプターに搭乗する準備をしているところです。日本政府の要請を受けて、横田基地は捜索・救助活動を支援するため航空機、要員を受け入れます。

3月12日

WHAT WE CAN DO TO HELP...

「我々は、悲惨な地震 津波に襲われた我々の同盟国である日本の国民とともににいる。我々ができることは何か、横田基地にある在日米軍とともに検討・準備しているところである」と、第18航空団司令官ウィルズバック准将は述べました。

嘉手納基地の第33救難中隊所属のHH-60捜索 救助ヘリ5機、及び第33、第31救難中隊の要員が横田基地向けに出発の準備を行なっています。更におよそ100名の要員が嘉手納基地から日本本土へ向け出発し、捜索・救助活動の支援、医療行為の支援、電力復旧などの作業にあたることになっています。



(2点、米空軍：ラッキーシャ・クロリー二等軍曹撮影)